SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

児童養護施設で暮らす子どものレジリエンスに関する研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2019-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井出, 智博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00026557

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ２１０４４

研究課題名（和文）児童養護施設で暮らす子どものレジリエンスに関する研究

研究課題名（英文）A Study of the Resilience of Children Who are Living in Children's Home

研究代表者
井出　智博（IDE, Tomohiro）

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：２０５２４３８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：児童養護施設児童のレジリエンスの特徴を明らかにすると共に，レジリエンスを育むことに関連する要因を検討することを通して，レジリエンスを育むために必要な支援を検討した。一連の研究から以下のような支援が必要であることが明らかになった。(1)施設内での性的被害体験を未然に防ぎ，性被害体験を持つ子どもの支援に力を入れること，(2)慢性的な体疾患を持つ子どもの支援に力を入れること，(3)大人との1対1の時間を確保すること，(4)家庭的な養育の体験の中で子どもが子どもらしく過ごせる時間を提供すること，(5)おとな時代を生きる仲間と出会う機会として大学等への進学を位置付けること。

研究成果の概要（英文）：The present study investigated the support necessary to enhance the resilience of children who were living in children’s homes by clarifying the characteristics of resilience and factors related to nurturing resilience. The study was conducted with junior high school and high school students, and results revealed that the following factors were necessary to enhance resilience: (1) the prevention of sexual abuse within the facility and focused support for children who had experienced sexual abuse, (2) focused support for children with chronic physical illness, (3) the provision of one to one time with adults in daily life, (4) the provision of homely care that ensures that all children can enjoy their childhood, and (5) the promotion of enrollment to school and university as vocational opportunities to acquire knowledge and qualifications as well as places to meet peers who may live together in adulthood.

研究分野：臨床心理学

キーワード：児童養護施設　児童虐待　レジリエンス　社会的自立　心理的支援　自立支援

１．研究開始当初の背景

児童養護施設で暮らす子どもたち（施設児童）の多くが不適切な養育を経験しており，彼らが様々な適応上の問題を抱えることが報告されている(Widom, 2014)。しかし，不適切な養育を受けた子どものすべてが不適応的な成長を遂げるのかというと，必ずしもそうではない。過去に想像を絶するような不適切な養育を経験していながら，適応的な生活を送っていく子どもたちに出会うことも少なくない。こうした困難な状況に立ち向かう力としてレジリエンスという概念がある。レジリエンスの定義には様々な考え方があり，統一されているとは言い難いが，「困難を克服すること」「ストレス下でも維持される能力」「トラウマからの回復」という 3 類型（Masten et al., 1990）を含むものであると言えるだろう。

諸外国では不適切な養育を経験した子どもたちのレジリエンスに関する縦断研究が複数行われており，重要な知見が報告されている。一方，我が国でも，不適切な養育を受けた子どもたちへの支援に関する実践研究をリードしてきた斎藤（2005），庄司（2009），奥山（2010）といった研究者たちが施設児童をはじめとして，不適切な養育を受けた子どもたちへの支援にレジリエンスという概念を導入することの重要性に言及している。しかし，我が国において，不適切な養育を受けた子どもや社会的養護の領域におけるレジリエンスの実証的な研究はほとんど行われていない。

２．研究の目的

そこで，本研究では施設児童のレジリエンスを様々な角度から検討し，レジリエンスを育む支援の方法や内容を明らかにすることを目的とした。本研究は 3 つの研究から構成されており，第 1 研究では，施設児童と家庭児童のレジリエンスの様相を比較することにより，施設児童のレジリエンスの特徴を明らかにすることを目的とした。また，第 2 研究では，ロジスティック重回帰分析を用いて施設児童の個人特性や成育歴等の過去の経験の中にある，レジリエンスの保護・促進要因，抑制要因を明らかにすることに取り組んだ。さらに，第 3 研究では，成功的な社会適応を遂げている施設出身者（レジリエント）へのインタビュー調査を通して，施設児童のレジリエンスを育むために必要な支援について検討した。

なお，一連の研究手続きは静岡大学「人を対象とする研究に関する倫理審査」を受審し，承認を得た。

３．研究の方法

（1）第 1 研究：児童養護施設児童と家庭児童のレジリエンスの比較

施設児童のレジリエンスの特徴を明らかにするために家庭児童との比較を行った。対象は施設群として施設（7 施設）に入所中の中学生 80 名，高校生 42 名，家庭群として中学校，高校に通う中学生 560 名，高校生 300 名である。レジリエンスの測定には「自己志向性」「関係指向性」「楽観性」の 3 因子から構成される石毛・無藤（2005）による中学生用レジリエンス尺度を用いた。

（2）第 2 研究：児童養護施設児童のレジリエンスの保護・促進要因の検討

施設児童のレジリエンスに関連していると考えられる要因を収集し，ロジスティック重回帰分析を用いて，保護・促進要因，抑制要因を検討した。対象者は施設の中高生児童 188 名（男子 94 名，女子 94 名）である。

レジリエンスの判定には，子ども用行動チェックリスト（CBCL）や中学生用レジリエンス尺度，Rosenberg の自尊感情尺度など複数の基準を用いて多面的な評価を行い，複数の領域において基準を満たすものをレジリエントとした。また，レジリエンスの保護・促進要因として成育歴や個人特性，児童期までの経験などに関する情報を施設の担当職員から収集した。

（3）第 3 研究：児童養護施設出身者の成功的自立を支える要因の検討

施設児童のレジリエンスに関連する要因をより詳細に把握するために，施設から成功的な自立を遂げ，社会で暮らしている施設出身者（レジリエント）を対象とする半構造化面接によるインタビュー調査を行った。その際，レジリエントの評価を多角的に行うために，雇用，住居，教育歴，社会活動，精神障害，依存，暴力行為という 7 つの側面から評価を行った。施設退所児童の約半数が就労して最初の 3 年目までに離職するという先行研究の結果を参考にして，少なくとも施設退所後 3 年以上が経過していることも基準として加えた。こうして選出されたレジリエント（7 名）を対象として「あなた（RY）が適応的な自立を遂げることを支えたものは何か」をリサーチ・クエスチョンとした半構造化面接を実施し，逐語記録の内容をもとに，KJ 法に準じた方法で分析することで，レジリエントの適応的な自立を支えた要因を検討した。

４．研究成果

（1）施設児童のレジリエンスの特徴

第 1 研究からは以下のような施設児童のレジリエンスの特徴が明らかになった。

①家庭児童に比べてレジリエンスが低い施設児童

中学生レジリエンス尺度の結果を生活環境（施設 vs 家庭），校種（中学 vs 高校），性別（男 vs 女）の 3 つの要因を考慮して比較（三要因分散分析）したところ，施設児童は家庭児童に比べて，困難に直面した際に自分の力で何とかしようとする傾向である「自己志向性」と，他者に頼って何とかしようとする傾向である「関係指向性」が弱いことが明らかになった。また，出来事を楽観的に捉える傾

向である「楽観性」については，施設の女子児童が他の群に比べて弱いことが明らかになった。男女による違いはあるが，おおむね家庭児童と比べると施設児童の方がレジリエンスが低く，困難に直面した際の対処に困難を抱えていることが推察された。

②施設男子児童と女子児童の差異

施設児童について，被虐待経験の有無によるレジリエンスの差異を検討したが，男女ともに被虐待経験による差異は認められなかった。さらに，施設児童のレジリエンスの特徴を明らかにするために，男女ごとにクラスター分析を行ったところ，施設の男女ともに 3 つの群に分類された。しかし，男女ではその特徴が異なることが明らかになった。すなわち，施設男子では先述したレジリエンスの 3 つの因子がすべて強い群，すべて弱い群とすべてがその中間にある群の 3 群に分けられたのに対して，施設女子児童では，すべてが強い群とすべてが弱い群に加えて，「自己志向性」と「楽観性」は弱いものの「関係指向性」は強い群の 3 群に分けられることが明らかになった（図 1，2）。こうした結果からは，施設退所後のリスクを考えると，レジリエンスのすべての内容で低い傾向を示したレジリエンス低群や中群に属する子どもたちにおいて困難に直面した際に対処し，乗り越えることができないリスクが高まる可能性があるため，そうした子どもたちへの直接的，間接的なサポートについて検討する必要があることが明らかになった。一方，女子児童においては，男子児童と同様に，すべての因子で高い得点を示すレジリエント高群とすべての因子で低い得点を示す低群に加え，自己志向性や楽観性では低群と同様の結果示しながらも，関係志向性においては高群よりも高い得点を示す関係志向性優位群の 3 つの群が抽出された。こうしたことからは，施設男子児童と女子児童では異なったアプローチが必要であることが推察された。具体的には，関係志向性が高い女子児童の群に対しては，リービングケアやアフターケアを進める際，頼るべき人や頼るべき場所を具体的に示すことが有効な支援方法となり得ると考えられる。

（3）施設児童のレジリエンスの保護・促進要因

第 2 研究において，基準に基づいて施設児童を評定したところ， レジリエント（resi）は 69 名（36.7%），レジリエントでない子ども（n-resi）は 119 名（63.3%）であった。また，レジリエンスの保護・促進要因，抑制要因と考えられる子どもの特性や成育歴について表 1 のようにダミー変数化したうえで，レジリエントか否かを従属変数，レジリエンスの保護・促進要因，抑制要因を独立変数としたロジスティック重回帰分析を行った。

その結果，被虐待経験の有無や発達障害の傾向，担当職員の交代などは保護・促進要因，抑制要因とは言えないことが明らかになった。一方で，施設に入所するまでの性虐待の経験や入所中の性被害など「性被害体験がない」ことが最も強い保護・促進要因であり，

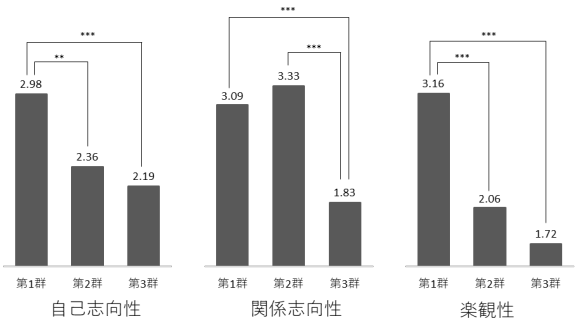

図 1　施設男子児童のレジリエンスのクラスター分析

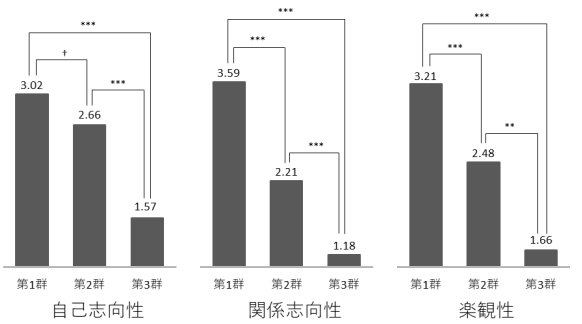

図 2　施設女子児童のレジリエンスのクラスター分析

表 1　保護・促進要因とダミー変数

変数	ダミー変数	
性別	男＝0	女＝1
児童期の学業成績が良好	該当しない＝0	該当する＝1
児童期の運動神経が良好	該当しない＝0	該当する＝1
慢性的な身体疾患がない	該当しない＝0	該当する＝1
被虐待経験がない	該当しない＝0	該当する＝1
性的被害の経験がない	該当しない＝0	該当する＝1
頻繁な養育者の交代を経験していない	該当しない＝0	該当する＝1
発達障害の診断・傾向がない	該当しない＝0	該当する＝1
児童期に親友がいた	該当しない＝0	該当する＝1

表 2　ロジスティック重回帰分析の結果

変数名	オッズ比	p	95%信頼区間
女性である	.41	.010 **	.21 - .80
児童期の学業成績が良好であった	1.43	.295	.73 - 2.79
運動神経がよかった	2.95	.006 **	1.36 - 6.41
慢性的な身体疾患が無い	3.62	.015 *	1.28 - 10.22
被虐待経験がない	.67	.310	.31 - 1.46
性的被害体験がない	4.00	.018 *	1.27 - 12.59
担当の頻繁な交代を経験していない	.96	.902	.49 - 1.89
発達障害の傾向がない	1.21	.615	.57 - 2.56
児童期に親友がいた	.73	.428	.34 - 1.58

モデル χ^2 検定 $p<.001$，Hosmer-Lemeshow Test $p=.658$，判別的中率71.8%

次いで，「慢性的な身体疾患がない」こと，児童期までの間の「運動神経がよかった」ことが中高生になった時のレジリエンスの保護，促進に影響を与えていることが示された。逆に，女性であることはレジリエンスを低下させる要因であることが示された（表 2）。

こうした知見からは，施設児童のレジリエンスを高める支援を考える時，性的虐待経験がある子どもや慢性的な身体疾患がある子どもの支援の在り方について検討すると共

に，施設内で性被害体験を生まないような支援の在り方について考える必要があることが示唆された。また，運動のような自己効力感を高められる機会があることがレジリエンスを高めることに影響を与える可能性があることも示唆された。

（4）成功的自立を支える要因

第 3 研究において，成功的な自立を遂げた施設出身者（レジリエント）へのインタビュー内容について，KJ 法に準じた方法を用いて整理，分類したところ，71 ヶ所の「適応的な自立を遂げることを支えたもの」に該当する記述が抽出され，6 つの大カテゴリーと，その大カテゴリーのいずれかに分類される 25 のカテゴリーとどの大カテゴリーにも分類されない 2 つのカテゴリーが抽出された。以下，大カテゴリーを①～⑥で示し，カテゴリーを【】内に示す。なお，文中の RY はレジリエント・ユースを意味し，成功的な自立を遂げた施設出身者を指している。

①施設生活の中の資源：施設生活の中には【境遇を共有できる仲間との時間】や様々な行事など【施設生活の中の楽しみ】，施設【職員の存在】など RY が自立を進めることを支えた資源があることが示された。こうした支えがあることは施設生活の強みといえる。

②反面教師としてみる視点：しかし，仲間や職員は肯定的な意味を持つ存在としてだけではなく【反面教師としての子ども】【反面教師としての職員】など否定的にみられることもあった。【家族との適当な距離】を保ちながら【反面教師としての家族】を見る視点も含めて，「ああはなりたくない」と相対化することで同時に【将来の目標・展望】を持つことにもつながっていた。良くも悪くも多くの人に触れることが【将来の目標・展望】を育むことにつながっているのは施設出身の RY に特徴的なことであると考えられる。

③個人の特性：【将来の目標・展望】は【しっかりとした就職先】の選択に繋がり，退所後の生活の支えとなっていた。また，同じような個人の特性として，【楽観性】や【原動力としてのコンプレックス】，【用心深さ】，【得意なこと】などが含まれていた。

④施設生活で獲得した力：〈個人の特性〉の中でも【空気を読む力】や【誰とでも付き合う力】は特に施設生活の中で育まれていた。人の顔色を伺うことは施設の集団養育の影響を受けた望ましくない特徴かもしれないが，RY には強みとして意識されていた。

⑤施設生活・卒園後の生活を支えた人の存在：施設入所中は学校の友人など【施設外の友人の存在】や【教師の存在】が支えとなっていた。また，【家族・親戚の存在】，【きょうだいの存在】，【家庭的体験を提供してくれる人の存在】【支えてくれる誰かの存在】は入所中から退所後に至るまで重要な支えとなっていた。特に【家庭的体験を提供してくれる人の存在】とは，里親委託されていた里親や週末里親，外泊させてくれた施設職員などであるが，彼らに「家庭的な」「子どもとしての時間」を体験させてもらえたことが大切であったり，自立した後にも実家的な機能を果たしてくれていることが大きな支えとなっていた。施設退所後の支えとしては【卒園後に出会った仲間の存在】，【恋人・パートナーの存在】も挙げられた。

⑥いざという時の対処資源：RY のほとんどが【家族との適当な距離】を保つ中，個人や場所としての里親家庭や施設などである【いざという時に頼れる場所】【いざという時に頼れる人】が退所後にいざという時に頼る場所として支えとなっていた。

ここから得られた知見の要点をまとめると以下のようなものがある。

①施設職員を始めとするおとなとの 1 対 1 の関係が成功的な自立を進めるために重要な機会である。

②話さなくてもわかってもらえたり，境遇を隠すために自分を取り繕ったりしなくてもよい「境遇を共有できる仲間」がいることは施設生活を送る上で大きな支えとなる。

③施設退所後は専門学校や大学など，外で出会った仲間との関係を発展させる。専門学校や大学への進学は，知識を身に付けたり，資格を取ったりすることだけではなく，おとな時代を生きていく仲間関係を形成する時間を作ることにも大きく貢献している。

④施設の仲間や職員，家族の姿は支えになると同時に，反面教師ともなっている。自分の将来の姿（こうなりたい自分）とそうした反面教師の存在を相対化させることができることによって，将来展望を築いていくことができる。

⑤里親家庭や長期休暇などに行った職員宅での生活など，家庭を体験することも重要な機会であった。特に彼らが「子どもとして扱われた」という体験は重要である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①満下健太，井出智博（2018）SD 法による子どもの多様な家庭的背景に対するイメージの比較検討，福祉心理学研究，15/1（査読有）

②Yukihiro Takagishi, Tomoko Kuraoka, Tomohiro Ide（2017）Foresight is Partially Formed from Resilience: The Relationship Between Self-Esteem and Future Time Perspective Among Japanese High School Students, International Journal of Education, Culture and Society 2/2 76-82（査読有）doi:10.11648/j.ijecs.20170202.15

③井出智博（2017）児童養護施設で暮らす子どものレジリエンスの特徴，福祉心理学研

究 14/1 44-53（査読有）

〔学会発表〕（計４件）
①井出智博（2017）児童養護施設児童にとって将来の夢は自尊感情を育むことに繋がるのか，日本心理学会第 81 回大会

②井出智博（2017）児童養護施設児童のレジリエンスと時間的展望の関連，日本福祉心理学会第 14 回大会

③井出智博（2016）児童養護施設児童のレジリエンス促進要因としての自尊感情　□多母集団同時分析による過程で暮らす子どもとの比較検討□ ，日本心理臨床学会第 35 回大会

④井出智博（2015）児童養護施設で暮らす中高生児童のレジリエンスの様相，日本福祉心理学会第 13 回大会

〔図書〕（計１件）
①村山正治監訳　井出智博・吉川麻衣子編著（2015）心理臨床の学び方　鉱脈を探す，体験を深める，創元社（201 ページ）；第 5 章　研究と臨床の関係性　臨床に基づいたエビデンスを求めて，p83-102

〔その他〕
ホームページ等
https://blog.goo.ne.jp/idtomoro

６．研究組織
(1)研究代表者
井出　智博（IDE,　Tomohiro）
静岡大学・教育学部・准教授
研究者番号：　20524383

(2)研究協力者
片山　由季（KATAYAMA,　Yuki）
児童養護施設・春光学園

(3)研究協力者
森岡　真樹（MORIOKA,　Masaki）
児童家庭支援センター・はるかぜ